

## メッセージアウトライン

### ヨハネ16：1~15「御霊の働き」

「これらのこと」(1)とは15:18以下でイエスが教えられたクリスチャンたちに対する迫害のこと。この世はキリストを喜んで受け入れるどころか、かえってこれを憎み、迫害する。そのような時に弟子たちがつまずくことのないようにと、イエスは前もってこれらのことを話されたのである。2~4節はその詳しい説明である。「会堂」(2)とはユダヤ人の集うユダヤ教の会堂のことで、ここから追放されることは社会的な交わりを断たれることに等しい。「事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思うときが来ます」→使徒8:1~3のサウロの例

「彼らがこういうことを行なうのは、父をもわたしをも知らないからです」(3)神に従い神に仕えていると思っていたユダヤ人たちが実はその神を知らなかったということは大変なことである。「わたしが初めからこれらのことをあなたがたに話さなかったのは、わたしがあなたがたといっしょにいたからです」(4)イエスが弟子たちと共にいた間は、イエスがこの世からの憎しみを一心に受けられた。しかし今やイエスは彼らのもとから去って天の父のもとへ行かなければならない。イエスがなくなった後には当然、迫害の矛先は弟子たちへと向かうのである。イエスはこのようにして弟子たちに心ぞなえをさせる。弟子たちの心は悲しみでいっぱいになっていた。(5~6)しかし、イエスは「わたしが去っていくことは、あなたがたにとって益なのです」(7)と言われた。それはイエスが去っていかなければ助け主が来ないからである。助け主とは三位一体の神の第三位格である御霊、聖霊なる神のことである。この御霊の働きについて8節以下で教えられている。「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます」(8)「罪についてというのは彼らがわたしを信じないからです」(9)人間の罪深い心はかたくなでイエスを信じようとしないが、御霊が働かれる時に、人々の心を開いてその罪を示し、認めさせるのである。

「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです」(10)十字架につけられるのは最も呪われた罪人だと世の人々は考えていた。しかし神がそのようにして死んだイエスを死からよみがえらせ、神の右の座に着かせることによって、このイエスが義なるお方であり、まことの救い主であるということが証しされるのである。「さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです」(11)御霊の働きはイエスが十字架によってさばかれたのではなく、この世を支配する悪魔がイエスの十字架によって敗北し、やがて終わりの時に完全にさばかれるということを世の人々に明らかに示すのである。弟子たちにはこれ以上イエスの話すことに耐える力がなかった。(12)そこでイエスは、「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます」(13)とさらなる御霊の働きを教えられる。御霊は自分から語るのではなく、聞くまます話をし、示される。御霊はイエスからのものを受けて、弟子たちに知らせる。そうすることによって御霊はイエスの栄光を現す。(14) 15節では父なる神と、子なるイエスと御霊の一体性が現されている。

今この時代に生かされている私たちも、御霊に拠り頼み、御霊の働きを願いつつ福音を宣べ伝えていこう。そこに必ず実りがある。